

# 「オコンゴ」考

西光知巳

口之津の行政区、南大泊に「オコンゴ」と呼ばれる地名がある。かつて遊郭があった所としても知られている。口之津の字界図を見ると、早崎名と町名みょうの間を小さな川が流れ「苧抜川」とある。これをオコンゴと呼ぶらしい。(若い頃、早崎の祭りか何かで飲まされて酔っ払い、帰りにこの川に自転車と一緒に転落したことがあった)。

またこの近くに「苧抜川」や「苧抜平」という字あざの区画もある。以前から珍しい地名なので、どうしたいわれがあるのか疑問に思っていた。しかし思うばかりで調べもしなかった。

最近、口之津史談会の発足もあって調べてみる気になった。近隣の人に「なしてオコンゴで云うとかない」と聞いたが、わからない、知らないという人が多かった。「オドンがコマカトキヤ、オコンゴ川言いよった」という老婆もいた。

まさか遊女の「おコンさん」が身投げをした川ということでもあるまい。

たまたまある人から「子供コドモが時やオコギガワて言いよった」

と調べているうちに聞いた。その後も何人かの人が「オコギガワ」と言っていた事を話してくれた。

まず苧抜川の「苧抜」を角川の漢和辞典で調べた。苧抜という用例はなかったが、「苧」はあった。「チョ」「カラムシ」とあり、①麻の一種、自生または栽培する。茎の皮の繊維で布を織り、縄の材料にする。

②「お」「麻」または「からむし」の皮からとった繊維で「なわ」または布とする。とある。

「おこぎ」を広辞苑で調べたがない。「からむし」を引いてみたら苧からむし、梟からむし、「むし」は朝鮮語のMOSSI(苧)の転か、あるいはアイヌ語のMOSE(蕁麻)の転か、イラクサ科の多年草。(中略)茎の皮から繊維をとり(青苧)、糸を製して越後縮などの布を織る、木綿以前の代表的な繊維で現在も栽培される。苧麻(ちよま、まお)、草真麻(くさまお)、ラミ―は同種とある。

なお「お」「ヲ」は麻、苧で①アサの古名、②アサ、からむ

しの茎の周辺部の繊維からつくった糸とある。これで「苧」は「お」であることは間違いないと思つた。

次は「扱」は「ソウ」「キュウ」「あつかう」とあつて、その字義の③に「こく」「しこく」「こきおとす」「稲を扱（こ）く」とあつた。「稲を扱く」というのは「千歯こぎ」や「稲こぎ機」で籾をこぎ落とすことであり、広辞苑にはこく（扱く）とあり、細長いものを片手で握つて他の手で引く、しごく又は「しごいてこぎ落とす」とある。

そして日葡辞書の「イネヲコク」又は「コギオトス」を引用している。

以上のことからオコンゴ（ウ）は苧扱川（おこぎがわ）で苧麻（ちよま）をしごいて茎の皮をはぎとり、それを晒して繊維をとる仕事をした川であることから言いならわした地名であろう。そしてその付近一帯では苧麻（ちよま）からむしが栽培され、苧扱平（オコンピラ、おこぎびら）、苧扱川（おこぎがわ）の字（あざ）がついたのであろう。

それにしてもそうした事をいつ頃から始め、いつ頃やまったのか、それを知る手がかりはつかめない。前にも述べたが、広辞苑には「苧は木綿以前の代表的な繊維で現在も栽培されている。」とある。また真麻（ま）、苧麻（ちよま）は「からむし」の別称とあ

り、麻の項を見ると、大麻、苧麻、黄麻、マニラ麻などの総称、これらの原料から製した繊維。

糸、綱、網、帆布、衣服用の麻布などを作る、「お」とある。

苧扱川、この川で（お）苧（ちよま）の皮を扱ぎ、晒して作った繊維で（糸で）布を織つて衣服とし、網を作つて魚をとり、船をもやう綱も作つたであろう。また原料の苧は他の地方からも持ち込まれ、製品は船積みされて移送されたかも知れない。そうした人々の生活が偲ばれる。

そして同じようなことが日本の各地で行われた筈だと思ひ、同名の地名や似た地名、河川名が他にないかと心にかけていた。たまたま町立図書館のインターネットで調べてもらったら、福岡県久留米市の池町川（西鉄久留米駅近く）付近をかつては苧扱川町（オコンガワマチ）と言つていたこと。香川県観音寺市室本町に苧扱川（ウコクガワ）がある事を知つた。

全国にはまだまだ私の知らない苧扱川があり、あるいは「苧扱」という姓もあるのではないか思つたりしている。

ついでながら井上靖氏の「風濤」を読んでいたら、高麗王が功臣に苧布を賜つたこと、元の世祖フビライに金・銀器などとともに細苧布（ちよま）を貢物としたことが出ていた。（二〇〇五年



一〇月)。

その後、地名や姓に「苧」のつくものがあればと、何とか気が付けていた。たまたま昨年(一九六〇年)の二月一六日付、朝日新聞の「日本音紀行」という記事で、福島県の会津若松の近く、大沼郡昭和村に「からむしの里」があり、そこからむしが栽培され「からむし織」が織られていることを知った。

それによると、昭和村では六百年以上も前からからむしを栽培し、それから繊維を取っていた。そして、それは高級織物の越後上布や小千谷縮ちぢみの原料となっていたこと、現在、苧の栽培と繊維を取る技術は国選定保存技術に認定されて、からむし織が織られていることなどが紹介されていた。

そこで、厚かましく昨年書いた「オコンゴ」考を送りコメントをお願いしたところ、くわしい資料が同封され、インターネットで「オコンゴ」を入力検索したところ「佐賀県伊万里市南波多町原屋敷にオコンゴと呼ばれる道(道路)があることを見つけたこと。『苧』という字のつく地名は時々見かけること、葉かみ沢さんという方にお会いしたこと」などが記されていた。

一方、春の甲子園の高校野球を見ていたら、神港学園高

の選手に「苧坂君」という生徒が捕手で出場していた。そこで苧のついた姓や地名が他にまだあるはずと思い、また図書館のインターネットにお世話になった。その結果、次のような地名が検索された。

○福島県には苧畑おぼた沢 ○栃木県鹿沼市麻苧あそ町

○新潟県山古志村の種苧たねお原、松代町の苧島おしま

○京都市下京区に真苧屋まおや町 ○島根県松江市に苧町おまち

○秋田県には葉岱かあむしだ、打葉うちからむし、葉沢かむしなどの字がある。

また、姓では苧坂の他に間苧まおた谷、苧坪おつぼ、苧野ねりお、練苧おほら、苧畑おぼた、苧本おもと、麻苧あさお、苧川おがわなどの二八の苧のつく姓があることがわかった。(残念ながら苧おこぎ扱はなかった)。葉のつくのを入れるともっと多いはずだ。

なお、福島県昭和村の「からむし工芸館」からいただいた研究報告書の『苧かむし』に「日本におけるからむし生産の歴史」という項があり、それには縄文・弥生の頃から、苧から繊維を取り布などを製していたらしいこと、魏志の倭人伝には倭人が稲とともに苧麻、桑を植えていたことの記述があり、万葉集にも「苧」とのかかわりのある歌があること、律令制下の租庸調の税のうち庸や調として苧などから作ったと思われる

る布があり、正倉院にも保存されていること、室町時代には越後や信濃、関東地方では青苧あおそ（苧からとった繊維）の取引が盛んに行われ、青苧の座も結成されていたことなどがくわしく紹介されていた。

また日本中世史研究の権威、永原慶二先生の著書にも「農村と都市の民衆」の項に、「商品化する青苧」という見出しがあり、そこに農家の女性が苧から糸をとり、布を織る苦労の様子などが著述されている（大系日本の歴史六 内乱と民衆の世紀、小学館）。

江戸時代になると、西日本を中心に木綿の栽培が広く行われるようになり、衣料の多くは綿製品になったが、武家の袴や高級織物としての上布や縮、また夏の衣料や蚊帳など苧の繊維から作られたものの需要はなお多く、東北の諸藩（米沢、会津、越後など）では藩財政の面からその栽培が奨励されていた。

司馬遼太郎氏の『街道をゆく』十、羽州（P一〇五）

一〇六）には、江戸時代の末、諸国を旅して実情を記録した安井息軒（一七九九〜一八七六）のことを紹介し、「息軒は米沢領が桑の適地であることに感心し、葉の大きさにおどろい

ている。また往きつゝ青苧の栽培のさかんな景観も見、

「越後、寧楽ならノ諸布、此ニ於テ資ルたよ」

という。青苧はカラムシともいう。多年生の草で茎の皮から繊維をとり、糸にして越後に送られれば、小千谷縮になり、奈良に送られれば奈良晒になった。べに花とともに米沢藩の二大産物であり、江戸後期にはこの藩は原料輸出だけでうま味がないことをさとり、縮の技術をとり入れ、藩営工場で完成品をつくるまでになった。」とある。

西日本の各地で自給的に衣料や各種の綱や帆布など苧麻の繊維から作られたものが多くあったことは否定できないであろう。

以上のことから、広く全国各地で苧にかかわる仕事が行われ、人々の生活と密接にかかわっていたことが伺われる。

口之津の苧麻まの畑作（小さい頃、自分の家でも苧を作っていたことなど数人の人から聞いた）も南大泊の苧扱オコシゴ川オや苧扱オコシゴ平などの地名も、そうした歴史的な背景や全国的な広がりの中で行われたものと思う。（戦争中子供の頃、苧の皮をはいだ話も何人かから聞いた。）

一度福島県の「からむしの里」に行ってみたいものだと思  
っている。

なお、「原色牧野植物図鑑」には次の記述がある。

『からむし』（まお）

「日本各地および中国、インド、マレーの温帯から暖帯に  
分布。原野に生えるが、畑に栽培される多年草。根茎は木質・  
茎に強い繊維があり織物をつくる。和名は皮のある茎を蒸し  
て皮をはぎとることにちなんだ。

一名まお（真麻）は、真の麻の意。漢名・・・苧麻<sup>ちよま</sup>

（英名でラミーというらしい）

この稿を書いたあと、永原慶二先生の遺著ともいうべき「苧  
麻の絹・木綿の社会史」（二〇〇四年二月一日吉川好文館）  
が手に入った。

オコンゴの遊郭については、大正七年編纂の『口之津村郷  
土誌』に記録がある。